

二つの波

フランスの詩人ラ・フォンテーヌ（Jean de La Fontaine、1621～95）の『寓話詩集』の中に、次のような内容の詩がある。

子羊が小川で水を飲んでいると狼がやってきて「俺の水飲み場を汚す無礼者！」と言って叱りつける。子羊は「20歩川下で飲みますからお許し下さい」と言うが、狼は許さない。さらに狼は「去年、俺の悪口を言ったのはお前だろう」と難癖をつける。子羊は「去年は生まれていなかったの、悪口を言うはずがありません」と言うが、「それならお前の身内が言ったに違いないからお前に責任がある」と言って、すべてを強引に子羊のせいにして、ついに狼は子羊を食べてしまう。

この寓話詩は、絶対的な権力を誇ったルイ14世の時代の「強いものは常に正しい」という風潮を皮肉ったものであると言われている。

話はフランスから中国へ飛ぶが、唐代の詩人、劉廷芝（りゅうていし）の『白頭を悲しむ翁に代わる』という詩の中に「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」という有名な一節がある。

この詩の内容は、先の狼と子羊の話とは違って、特に時代背景を意識しなくても、いつの時代の人にも素直に理解され、何となく安心感を与えてくれる。変わらないものと変わるものとを対比してとらえているので、変化に対する警戒心が薄れるからかもしれない。

ところで、最近の日本で絶対的な権力をふ

るっているのは「グローバル・スタンダード」である、といったら言い過ぎだろうか。いわゆる貸し渋りの問題も、BIS規制というグローバル・スタンダードがもたらす当然の帰結であるという説もある。さらには、BIS規制そのものが、強い力を持った日本の金融界を牽制するためのものだという説もある。

このようなグローバル・スタンダード悪者説になるほどと思う一方で、グローバル・スタンダードという名のもとに変えていかなければならないと思われるものも多々ある。すなわち、古くからあるものを現実に変えていくためには、相当なエネルギーが必要であると思われるが、そういった変えづらいものを変えていくためには、絶対権力的なものを利用するのは有効な手段かもしれない。

しかし、グローバル・スタンダードという大義名分のもとにすべてを変えなければならないという論調には、大多数の人が警戒心を抱くはずだ。やはり「花相似たり」に相当する変化しない部分、言い換えれば、ジャパニーズ・スタンダードを明確にしておかないと、私達は安心して変革に取り組むことができないのではないかとも思う。

ただ、もっと前向きに考えれば、ジャパニーズ・スタンダードとは何かというような議論に時間を費やすよりも、グローバル・スタンダードの圧力を利用して変革に取り組んでいくなかで、変えてはいけないもの（＝ジャパニーズ・スタンダード）が自ずと明確にな

るということなのかもしれない。

今の日本、とりわけ金融界に強く押し寄せている大きな波の一つがグローバル・スタンダードであることは間違いない。そしてもう一つの大きな波は、IT（情報技術）からの変革圧力である。

米国でアマゾン・ドット・コム（Amazon.com）社という、インターネットのURLをそのまま社名にしたネットワーク書籍流通業者が急成長していることは周知の事実である。

また米国では、E*TRADE（ET）社というインターネットを駆使したディスカウント証券ブローカーが既に大きな勢力になっており、近々日本でも業務を開始する予定だそうである。最近、ET社のシステムが長時間ダウンし投資家から起訴されたが、これを受けて同社では、システムの信頼性確保のための大幅な見直しに着手した模様である。

日本の金融界は、1970年代の第一次オンラインから85～90年の第三次オンラインまで、着々とシステムを更新してきた。その時代時代の最新技術を取り入れ、最も重要な顧客情報ファイル（CIF）については、世界最先端の内容を誇っている。そして、顧客の大事なお金を取り扱う金融業という性格上、システムの信頼性確保に多大な投資を行ってきた。

最近の米国の金融業者の身軽なシステム対応に比べると、日本の金融業界のシステムは

過剰品質の重厚超大型システムであるという批判もある。確かにこういう側面も見受けられるが、信頼性に多大な配慮を払うという日本での常識（＝ジャパニーズ・スタンダード）は、インターネットを通じたホームバンキングやホームトレードが盛んになればなるほど、ET社の例を見るまでもなく、ますます重要になってくるはずである。

「システムは金食い虫だ」「経営にどの程度役立っているのか」といった声もずいぶん聞えてくるが、見直すべきところは見直し、その一方で、信頼性を始めとする我々がこれまで大事にしてきたシステム上の価値観について、自信をもってその重要性を主張することも大事であろう。そうすることによって、今まで以上に顧客に信頼され経営に役立つシステムが提供できることになるからである。

「白頭を悲しむ...」の詩は「洛陽城東桃李の花、飛び来たり飛び去って、誰が家にか落つる」で始まる。冬が長い北国では春になると桃や李（すもも）だけではなく梅も桜も同時に咲くそうで、こういった様子を「梅桜桃李（ばいおうとうり）」というそうである。

日本の金融界の冬の時代もかなり長引いているが、グローバル・スタンダードとIT革新という二つの大きな波を上手く利用すれば、春をすぐ呼び寄せることができるであろう。「梅桜桃李」は近い。

（野村総合研究所 大野 健）